

## 「作家に憧れていた少女」

小学校の卒業文集の「将来なりたい職業」の頁に「作家」と書いたのは300名程の卒業生の中で私一人だけでした。同級生の女の子たちが、

「学校の先生」「スチュワーデス」「デパートのエレベーターガール」「アイドル歌手」とかに憧れ、男子も当時は「新幹線の運転手」などが多

かった記憶です。「作家になって、自分の書いた文章で読む人に感動を伝えてみたい」なんて、後にそれを読む度に少し気恥ずかしい思いでいっぱいになります。

有名人の方の人柄を判断するには多様な側面があるのですが、私自身の中では肩書が「作家」というだけで、尊敬と憧憬で好感ポイントが一気に上昇してし

まいます。子どもの頃、兄のお下がりが多く、私は新しい物をあまり買ってもらえませんでした。そんな環境の中で、リビングの本棚の隅の方に置いてあった

「**ノンちゃん雲に乗る**」というタイトルが目につきました。母が嫁ぐ時に持参してきたのでしょうか？ 頁をめくると少し日に焼けていました。8歳だった私には、一気に

読み進めて行きたくなる何か不思議な展開でした。小学2年生のノンちゃんは、夢の中で神社の境内にあるもみじの木に登り、池をのぞいていたら池に落ちてしまい、

気付くと雲の上の世界だったというファンタジーなのですが、大人になってから読むとまた違った面が感じられます。母親とお兄ちゃんのお出かけに置いていかれてし

まったノンちゃん的心情はまるで当時の「わたし」そのものでした。この一冊との出会いが将来の夢につながったような気がします。

【34期文化専攻／泉 由美子】

※本や読書にまつわる投稿を700字程度でお寄せください。詳しくは事務室まで  
なお、本の寄贈については現在受け付けておりませんので、ご了承ください。